

文章2

人は自分の鏡である。ひとりで自分のことをいくら考えていても、それは自分のほんとうの姿ではない。よきにつけ、あしきにつけ、自分で造りあげた空想上の影みtainなもので、何かにぶつかってはじめてそれは露になる。必ずしも相手が人間でなくてもよい。動物でも植物でも、料理でもフアッションでも、はたまた目に見えぬ空気や風の音でも、世の中のありとあらゆるものを、もし望めば他者と見なすことはできる。早い話が私の場合、こうして原稿用紙に向って、「自分と出会う」ことについて、いくらでも書けると思っているのにも拘らず、うまく表現できないで四苦八苦している。それほど心の中で思っていることと、実際に事に当るのとは違うのである。それに比べたら多くの人間とふれあう機会を持つ人々は、その度ごとに自分自身を新たに見直すことができるはずで、自分を失うどころか、豊かにする可能性に恵まれているのではなからうか。

(白洲 正子 「人は鏡」による)

【問題1】 文章1の「私」が雨の日に経験したことは、文章2で筆者が述べているどんな内容に当たりますか。

それをまとめて、三十字以上、四十字以内で書きなさい。「、」「や」「。」もそれぞれ字数に数えます。

【問題2】 【問題1】でまとめたことについて、あなた自身が見聞きしたことや体験したこと例をあげながら、

あなたの考えを五百字程度で書きなさい。なお、段落をかえたときの残りのます目は字数として数えます。「、」「や」「。」もそれぞれ字数に数えます。